1次/2次コントロールと抑うつとの因果検証

—SDS の変化量を用いた交互作用の検討—

塚原 拓馬

(実践女子大学 生活科学部)

キーワード: 1次/2次コントロール, 抑うつ傾向, 生涯発達

A causal relationship study of a depressive state on Primary/Secondary Control

Takuma Tsukahara

(Jissen Women's College)

Key words: Primary/Secondary Control, Depressive disorders, Life-Span Development

目 的

近年、社会的問題として心因性うつ病が注目されているが、その予防対策および解決法の主要なものに認知的方略が有効であることがわかっている。この認知的方略の代表的な理論に「1次/2次コントロール(Primary/Secondary Control ; PC/SC)」があげられる(Rothbaum, Weisz, & Snyder, 1982)。これは、従来の環境変化に対する統制の知覚を「1次コントロール(Primary Control : PC)」とし、自己の認知を変化させることで統制の知覚を維持する「2次コントロール(Secondary Control : SC)」という2次系の統制を提起したものである。

このPC/SCは、反応性うつ病を説明する統制不可性に焦点を当てたOvermier & Seligman(1967)による「学習性無力感理論(Learned Helplessness Theory : LH理論)」の修正理論として提起されている(ex.塚原, 2008)。この理論では統制不可能性の知覚が反応性うつ病を発生させるという説明がなされているが、実際は統制不可能性が知覚されても反応が低下しない結果も見られている。一方で、PC/SCは回避不可能な不快刺激に直面しても、その認知を修正することで反応性うつ病の発生を防ぐという仮説である。

さらに、このPC/SCはHeckhausen & Shultz(1995)により、Baltes & Baltes(1990)の生涯発達の視点を取り入れて、「Life-Span Theory」として展開されている。そこでは、若年の時はPCによる積極的な発達課題の達成を求めるが、老年になって様々な資源の限界が生じた場合、発達目標の喪失をSCにより補償することで適応を維持することができると仮定されている。このPC/SCがうつ病の発生を説明し、症状を解消する認知的方略であるか、また人間の最適発達を説明するLife-Span理論として妥当性があるかについては、さらなる検証が積み重ねられなければならない。

そこで、本研究では、抑うつの変化を縦断的(3カ月)に測定し、PC/SCがその変化量を説明できるかについて検証した。また、3カ月に体験したネガティブライフイベント(Negative Life Event ; NLE)の体験値による比較検討を行った。

方 法

200XX年、大学生を対象に約3ヶ月の間隔において2度に渡る縦断的調査を行った。回答の80%以上が同じ回答であったものや、全ての項目に回答していないものを除外した。

2度の調査のどちらにも参加した対象者のうち465名(平均年齢19.36歳, SD=1.60)の有効回答が得られた。なお、男女別の内訳は、男性180名(平均年齢20.00歳, SD=1.64)、女性284名(平均年齢19.46歳, SD=2.98)であった。

使用尺度は、1回目はPSC(Primary/Secondary Control Scale), SDS(Zung, 1965)の日本語版(福田・小林, 1973)を使用し、3カ月の間隔において2回目はライフイベント尺度(塚原, 2007)とSDSを使用した。

結 果

分析に先立ち、因子構造を確認するために、「PC」と「SC」には相関を仮定した確認型因子分析を行った。その結果、モデル適合度は容認できる指標が得られた($\chi^2(156)=336.578$, $p<.001$, GFI=0.930, AGFI=0.906, RMSEA=0.050)。

PC/SCによる抑うつ得点の差 分析においては、NLE高群とNLE低群に分け、「PC(高群・低群)」と「SC(高群・低群)」を独立変数、SDSの変化量を従属変数とした2要因分散分析を行った。なお、SDSの変化量は1回目と2回目の差を変化得点として用いた。

その結果、NLE低群においてSDS変化量に対する「PC」と「SC」の有意な交互作用は検出されなかった($F(1,457)=1.41$, ns)。一方、NLE高群においてはPCとSCおよびNLEにおいては有意な交互作用が見られた($F(1,457)=4.10$, $p<.05$)。交互作用が有意であったことから、単純主効果の検定を行った。その結果、「PC低群」と「PC高群」におけるSCの単純主効果はどちらも見られなかった。一方、「SC低群」における「PC」の単純主効果($F(1,211)=3.83$, $p<.05$)が有意であり、「SC高群」における「PC」の単純主効果は有意差が見られなかった。

考 察

分散分析の結果より、NLE低群においては有意差が見られず、NLE高群においてPCとSCの交互作用に有意差がみられた。これから、ネガティブな出来事を経験した場合、PCとSCは相互に関係し、抑うつを発生を回避することができると可能性が支持された。また、本研究で用いたSDSは縦断的調査による変化量を目的変数としていることから、抑うつの変化を予測することができると考えられる。このことから、PC/SCの作用は抑うつを説明する変数であるという因果関係を特定できることが示唆された。

しかし、理論的にはSCはPCの低下を補償するものとして提起されているが(ex.塚原, 2010)、この点について本研究では十分に検証されておらず、PC/SCの下位因子間での交互作用も明らかにされていない。そのため、より精緻化した分析を行い、PC/SCのどのような成分が抑うつの変化に寄与するのかを検証する必要がある。以上のことから、理論的妥当性を高めるためには、生涯発達の視点も取り入れ、PC/SCの作動関係をさらに検討していく必要があると思われる。

引用文献

- Rothbaum, F., Weisz, J. R., & Snyder, S. S. (1982). Changing the world and changing the self: A two-process model of perceived control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 5-37.
 塚原拓馬(2010). 1次/2次コントロールにおけるBack/upモデルの検証—尺度作成と否定的事態に対するコントロール方略の作動関係—. *教育心理学研究*, 58(2), 186-197.